サークルのこれから
職場の文化活動を中心に

「この三、四年、サークル活動は地についてきた。」と云われている。地につかないサークルと地についたサークルの性格のちがいは、歴史の経過のなかで、はっきりされている。

それは、戦争後、労働組合が結成され、組合の主体性を強めるなかで、従属的にサークルを組織したところが多かった。一人一人の要求を土台にし、もちあわせた力や考えをもとにしてサークルをうみだす考慮がメンミツになされなかった。組合活運家がサークル活動の中心になり少数人数の負担によってサークルの運営がなされ、ともすれば、「組合がサークルをひきまわす」非難ともなった。その反省段階に入ったとき、レッドパージの弾圧をうけた。サークルは労働運動もろともぐらついたところに、そのころのサークルの性格がみられる。

レッドパージのあと、労働運動のたてなおしのなかで、サークルも新しい姿で歩みはじめた。「暗い職場を、みんなでたのしく明るくしよう」と云いかわされたことは、レッドパージの苦しい経験から得たものであろう。人と人とのつながりを大切にし、サークルメンバー個々が人の生活を、「ゆたかに」しなければダメだ。サークルは自主的な集りであり、自主的な存在である、という点も強調された。

どう発展させるか

活動の展開とともに、「サークルのなやみ」「サークル活動の壁」のゆきづまり問題がだされてきた。具体的には、労働強化でサークル活動の時間がない、職制の圧迫のために、あるいは、指導者がいない、マンネリズムになり集りがわるい、費用が不足だ、活動家がほしい、というふうに、運営上の問題も、創造上の問題も、また資本攻勢も、イツシヨコタにみた「ゆきづまり」の壁を築いたのである。そうした問題の解決のために話しあいが深められ、サークルの交流もほんとに開始されたといえるだろう。その過程で「サークルのありかた」について考えは深められていった。

サークルは、人間同志話あい、与えあい吸収しあい、共同の活動を通して自分を育て他の人も育てる。そうして、封建的な思想や個人主義的な考えかたを判別し、それに負けない人間をつくる。つまり、日本の新しい労働者になってゆくことを、おたがいでつくりあっていく、ということがサークルの大切な点だ。当然、サークルは身分の上下、生活条件からくる複雑な人間関係などとは対立して、人間平等のヨコのひろがりになる、その「場」を自分のものにしてゆく、という考えかたもはっきりしたといえよう。そこで創造する文化、芸術作品は、古いものをつくりかえる力となる、いいかえれば、サークルは労働者階級の文化芸術をうみだす土台でもあるのだ。

このように、サークルのありかたについては、明確な考えがなされ、このことは各種サークルの共通した、しかも根本の意識をはっきりさせたといえる。しかし、意識だけではサークルの活動はみずみずしく展開しない。社会のうごきにともない、また、組合の運動とともにたえず体験し、発見し、蓄積し、仲間どうし影響しあい、ふとり、たかめるのであって、一時の静止状態もない。その活動に目的がないと。つまり、サークルを通して何をうみだそうとしているのか、その目的がないと、活動を持続することは困難である。目的といっても、「国民文化の創造」ということもあろうし、「たのしく語りあいましょう」ということ自体も目的である。

組合との関係

さて、いま、職場内のサークルの大きな課題は、組合とサークルとの関係である。「敵のマス・コミ」や「P・R」に立ちむかう労働者階級の文化活動が前進的になされなければならない。それには職場内の文化活動を、サークルを中心にして総合的に活発にしてゆく、ということ。それは、かつての繰返しではなく、組合もサークルもともに進むという考えが基礎になっている。それは正しいことだが、具体的に、組織的にさらに理論的に方針をうちだすことが不足している現状だと思う。各労働組合の全国大会の討議のなかで、この重要な問題に、どれだけ時間を翌ったであろうか。また、サークル自体が、全員で語りあってみる必要もあろう。

もう一つ、サークルに無関係な人たちが、まだまだ組合内にいるということを考えてゆかねばならない。

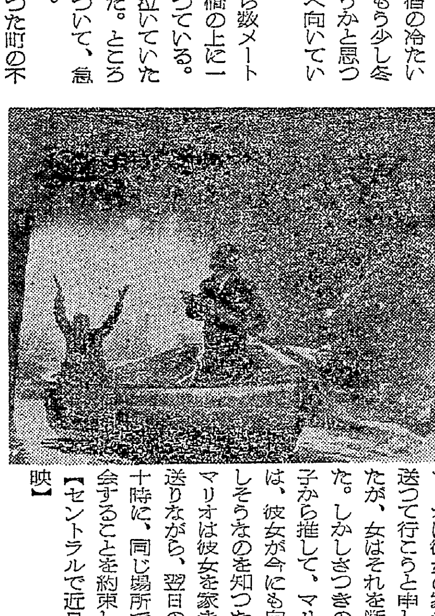
（しのぶすみ子氏は歌人・文芸評論家）

映画

白夜
銀獅子賞のイタリア名畫

かいせつ　ロシヤの文豪ドストイエーフスキーの同名短篇小説の映画化で、イタリア演劇、映画界の神と尊敬されているルキノ・ヴイスコンティ監督が、当代一の名女優マリア・シエルと、ジャン・マレエ、マルチエロ・マストロヤンニという国際的な大物スターを使って映画化したもの。

ものがたり　初冬のある日曜日の夜、街はもう真夜中近かった。マリオは一日、会社の課長一家のお伴をして郊外で遊んできた。二十五才の彼は、最近この港町に転勤してきたばかりで、独り者の彼に待っているのは下宿の冷たいベッドだけ、マリオはもう少し冬の街をぶらついてみようかと思った。彼の足は運河の方へ向いていた。ふと見ると、マリオから数メートル離れた薄暗い小さな橋の上に一人の女が背を向けて立っている。近よってみると、女は泣いていた。彼の好奇心はそそられた。ところが、女はマリオに気がついて、急に逃げ去ってしまった。その時オートバイに乗った町の不良がとびだしてきて、女をからかい始めた。マリオは急いで中に割ってはいり、不良どもを追いはらった。



そこでマリオは、はじめて女の顔を見た。まだ涙の乾かぬ小さな顔うるんだ瞳、その美しさに彼はすっかり惹いてしまった。そして彼女を夜の女と勘ちがいしたことを深く後悔した。が、好奇心はまだ去ったわけではない。

マリオは彼女の家まで送って行こうと申し出たが、女はそれを断った。しかしさっきの様子から推して、マリオは、彼女が今にも自殺しそうなのを知った。マリオは彼女を家まで送りながら、翌日の晩十時に、同じ場所で再会することを約束した。【セントラルで近日上映】

外国と日本の児童画
子供を親の名誉心の道具に

児童画記雑

森永キャラメルでは毎年「お母さん」を主題として、世界中から児童画を集めて入賞入選を決定し、それが児童画集として刊行されたり、全国の主要な都市を巡回展覧会をしたりして、大変文化的な功績を残している。私は昨年と一昨年の巡回展を久留米で見たり、それ以前のものの画集を買ったりしているが、概して云えば、西洋の児童画はノンビリとして、いかにも子供の世界を楽しく表現しているのが多い。絵によって豊かな情操が養われていくであろうということがうなづけるのである。しかるに日本の児童画になると、全く様相が一変している。第一、画用紙は大きい。それは結構であるがその大きな画用紙の中に、大きくノビノビと描かしてあるならよいのであるが、その中に描かれている状態は全くもって努力と労作の集積であって、見ていて重苦しくてイキがつまりそうである。

豊かな情操を養え

児童画ではこれを労役感とか、義務感とか云って良くない意味に使う言葉である。即ち、それは指導者が無理やりにギューギュー目に合わせて塗らせているのであって、努力と技工の集積には違いないが、児童の智能発達の段階と心理とを無視したものであって、決して豊かな情操が養われるものとは思われない。大人たちが、自分の名誉欲と競争心の道具に子供をかり立てているものであるとしか云えない。

北川氏の児童画の本にも書いてあるが、外国を巡っているときはどこかしらノンビリとした空気があって、児童画にもそれが投影されているのであるが、日本に帰ってき上陸すると、そのトタンにギユツとひきしめられるように人間同志の競争心やら、他人の悪口やらがうずまいていて、児童画にもそんな大人の感情が充満しているつまり、これは日本があまりに人口が多すぎて、生存競争がひどいのでこんなになるのであろう。外国で児童画を教えていると、子供たちは自分で自由に入学さしてくれといってくるが、日本では高校の娘さんなどでも、親につれられてきて、年はいくつかなどきくと本人は答えないで親が答える。

技工を詰めこむな

外国の子供は自由に描かせるといろいろなことを工夫して表現するが、日本ではある程度までは自由さが出てくるが、どうしても頭打ちになってしまって伸びない。教えてもらおうとする態度が多すぎる。というような意味のことを書いてある。

日本では指導者同志や親同志があまりに競争し、子供の発達段階を無視して技工を詰めこむので、技工的には上手な画が出来るが、子供らしい無邪気さとか、純真さとか、誠実さとか、夢とか単純さとか、過去の環境の影とかいったような、児童の心に大事な現在というものが表われなくなるのである。そんな風な児童の現在の心を豊かに表現させようとすると、下手だとかなんとかいってしまうので、子供は自然な自分の心を描かないようになってしまう。

（家永勝之亮＝教育研究所嘱託）

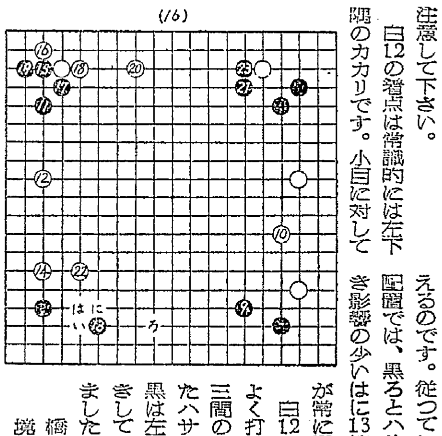
（土曜会）

囲碁教室 (56)
秀策流の布石 11

黒11で左下隅をシマらずに、左上隅にカカってゆくのは積極的な打ち方です。黒11以後の打ち方はいろいろあって一々述べ切れませんので、実戦例一つを揚げるに止めます。16図は本因坊秀策名人と高崎泰策六段（先）の一局で、黒一目勝の碁です

16図　左下隅は白いとかかると黒ろのハサミがヒラキを兼ねて絶好点になります。従って左下隅は白のカカリが制限されている処ですから、ここのシマリはさほど急ぐ必要がないという考えも成立つわけで、黒11と積極的にカカって行ったのです。なお黒11によって左右両上隅の白は何れも低位となり、黒から両ガケされる姿勢にあることに注意して下さい。

(16)

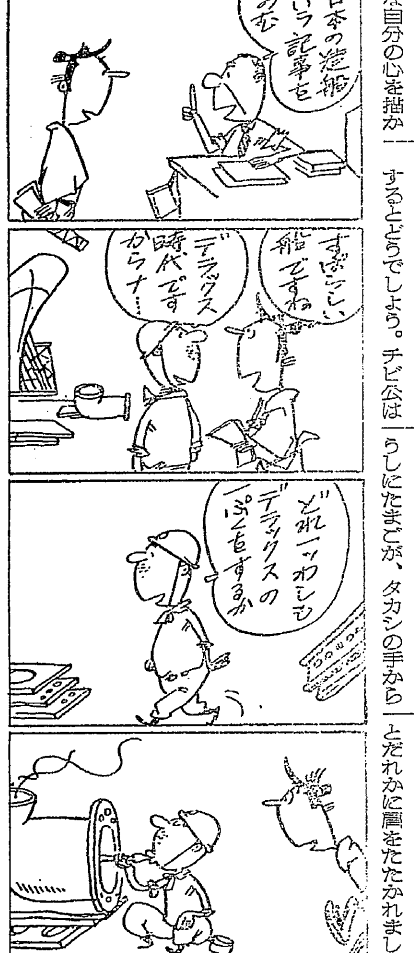


白12の着点は常識的には左下隅のカカリです。小目に対してはいのケイマが最もきびしいカカリですが、低く隅に寄っているだけに黒ろとハサまれたとき白にとってもまたきびしくこたえるのです。従ってこのような配置では、黒ろとハサまれたとき影響の少いはに13等のカカリが常に選ばれます

白12のハサミもよく打たれますが三間のゆっくりしたハサミなので、黒は左上隅を手抜きして13とシマりました。

橋口　初段
撰　徹一

長屋太平記　中村かめお



【どうわ】三つのゆで卵
小森みちこ

日曜日の朝のことです。きょうはお父さんに遠足につれて行ってもらう約束だったので、タカシはうれしくてうれしくて、朝早くから目をさましていました。

お天気がしんぱいなので、窓をあけてみると、東の空が明るくなっています。「早く太陽がのぼればいいのになあ」、そうひとりごとをいうと、だれかが足もとで、「クク、ククク」と笑うのです。びっくりしてのぞいてみたら、ニワトリのチビ公なのでした。窓の下にチビ公の小屋があったのですタカシは「そうだ、チビ公にエサをやらなきゃ」と思って、パジャマのまま大いそぎで庭にとびだしました。

するとどうでしょう。チビ公はトリ小屋のわらの上に、あたたかいたまごを三つもうんでいるではありませんか。だってタカシのチビ公がたまごをうんだのはこれがはじめてだったのです。

「すごいぞ、チビ公」

とタカシはさけびました。

「そうだ、きょうは遠足だから、チビ公は三つもたまごをうんだんだな」

遠足には、お父さんとお母さんとタカシと三人で行くのです。

タカシは「早くお母さんに見せてゆでてもらわなければ」と思って、三つのたまごをかかえてかけだしました。ところがあんまりあわてたものですから、つまづいてころんでしまいました。そのひょうしにたまごが、タカシの手からとびだしました。タカシは「しまった」と思ってすぐとびおきました。するとたまごは、ころころと垣根のすきまから往来の方へころがって行くのです。

タカシは「ヘンなたまごだなあ」と思いながら、木戸をあけてたまごを追いかけました。たまごはどんどんころがって、とうとう電車通りへ出てしまいました。

そのとき、向うから牛乳屋のおじさんが、自てん車にのってやってきました。

「やあ、タアちゃんお早う」

おじさんは自てん車からおりると

「おやおや、朝早くからキャッチボールかい」

と笑いながら、たまごをひろってぽんぽんと投げ返してくれました

「ヘンなことをいうおじさんだな」と思いながら、一つづつ受けとると、どうしたことか、それはみんな野球のボールなのです。タカシがポカンとしていると、

「ようどうしたい。タアちゃん」

とだれかに肩をたたかれました。

「痛いなあ」

思わず大きなこえでいったとたんタカシは目をさましました。まくらもとでお父さんが、

「よう、どうしたい。タア坊のネボ助」

とニコニコ笑いながら、タカシの顔をのぞきこんでいました。

「なあんだ、ゆめかあ」

タカシはねむい目をこすりこすり顔を洗いにお勝手へ行きました。お勝手ではちょうどお母さんが、ゆでたまごをおなべからとり出しているところでした。

窓からは朝日がキラキラとさしこんで、三つのゆでたまごからホカホカゆげが立っていました。

【讀書案内】高級な専門誌
「月刊労仂問題」創刊号

日本評論新社から「月刊労働問題」が創刊された。第一号（六月）は最低賃金法案の特集で、労働省の担当官が法案を解説し、一橋大商要光俊、慶応大黒川俊雄教授らがそれぞれの角度から突っ込んでいる。中で東大講師の藤田若雄氏は「最賃闘争と統一労働戦線」にふれ「審議会や政府案批判について（全労・総評の）統一見解が成立したに拘らず、闘争方法において分裂したとすれば、それは何物であったかを考える必要がある」とし「最賃闘争を中小企業労働者の組織強化闘争と結合すること」労組が「全産業の労働者を構造的に代表することが必要である」と指摘している。その他〃今月の労働問題〃は大河内一男氏の「日本労働協会と労働者教育」今井一男氏の「今年の春闘から」など。連載三講座は野村平爾氏の「労働法教室」、山城章氏の「労働の経営的見方」、藤本武氏の「賃金と労働組合」。

読みものとしては朝日新聞記者村上寛治氏の「総評物語」第一回などが興味を引く。ほかに「世界の話題」「労組スクラップ」などのコラム欄、判例研究や国会議事録の資料など。いまのところ労資双方をねらった高級労働問題専門誌といった感じだが、もっと現役労組幹部や職場活動家の発言が多くなってくれればおもしろいだろう。

（B5判八二頁・一二〇円）